

有機技術通信

トピックス

- 有機農業の研究技術開発・普及の体制確立に向けて
- 有機農業大学講座&第3回研究会（公開セミナー）のご案内

www.ofrc.net

特定非営利活動法人
有機農業技術会議 事務局
発行責任者：藤田 正雄

有機農業の研究技術開発・普及の体制確立に向けて —研究者からの視点—

長谷川 浩（東北農業研究センター）

研究開発の方向

有機農業の推進に関する法律と基本計画の制定に伴い、研究技術開発・普及の体制をいかに確立するかが大きな課題となっている。ここでは、研究者の視点から問題提起を行う。今後の論議におけるたたき台となれば幸いである。

最初に行うべきは、これまで30年以上にわたって民間で行われてきた有機農業技術の実態を聞き取り、観察および分析データから整理することである。現場の実態を知ることなしに研究者側の一方的な発想で課題設定をしてはならないと思う。実態調査から整理された技術的な課題を解決する「問題解決型研究」を行うのが1つのアプローチである。もう1つのアプローチ

有機農業大学講座&第3回研究会（公開セミナー）

有機農業を進めていくとき、そもそも有機農業とはどういう農業なのか、化学肥料と農薬を使わなければ有機農業なのか、などなど質問、疑問は尽きません。しかし、有機農業推進法が昨年12月に成立した今、有機農業を軸とした農業に転換して、食料自給率の向上を図るときと考えて、ここに大学講座&研究会を開催します。

日時 2007年11月23日・24日

場所 信州大学理学部 講義棟 1階 1番教室

参加費 23日券・24日券 各2000円、全日券3000円、懇親会費3000円

賛助会員は懇親会費以外1000円引&研究会無料

24日券・全日券に第3回研究会参加費は含まれます

会場案内

JR松本駅正面口を出て向側（右前方）エスパ地下1階の松電バスターミナル6番線から「信大病院経由浅間温泉行き」に乗車し、「信州大学前」下車。所要時間約20分。大学北に市営駐車場有。

内容

23日	10:00~10:30	開講式
	10:45~12:15	吉田太郎「キューバの有機農業」
	13:30~15:00	西尾道徳「堆肥の効果と施用量の概算」
	15:15~16:45	実施者による実践報告（予定3名）
	17:15~19:30	懇親会
24日	9:00~10:30	稲葉光國「いのち育む有機稲作」
	10:45~12:15	藤山静雄「生態学からみた有機農業」
	13:30~16:30	第3回研究会「堆肥・土づくりを考える」 橋本力男、尾島一史、酒井信一



定員は各170名です。11月20日までE-mailまたはFAXによる事前申し込み受付をしております。。希望日（23日・24日・全日・懇親会）、氏名（所属）、所在都道府県、連絡先を添えて申込みください。料金は当日払い受けます。詳しくはウェブ上（www.ofrc.net）にてご案内しております。定員までは当日参加も可能です。

は、長年の尽力により技術的にも経営的にもさらに地域への波及の面から成功を収めている先進的な農家における成功要因を解明する方策である。後者の方法は、有機農業技術の原理を確立することにもつながり最も重要なアプローチと考えている。

技術移転・普及の方法論

有機農業技術は地域性が大きいとされる。周辺農家や条件が異なる農家に対して、先進的な農家の技術を移転・普及する方策も極めて重要な課題である。これまでの農業技術開発と異なり、試験研究機関における有機農業技術開発には農家が主体的に参画すべきであると考えられる。技術開発における重要なプロセスは、技術開発方針や戦略の策定、試験設計の検討、試験結果に基づく普及技術の選定（技術評価）があげられる（図）。この3つの重要なプロセスにどのように農家が参画すれば、有機農業技術開発は効果的となるであろうか？今後整理すべき課題である。有機農業の研究技術開発を進めるにあたって忘れてはならないのが、学際性である。有機農業技術は、技術的や経営的な側面だけでなく環境学、生態学、生きがいや文化などの面からも評価が必要だからである。普及においても、従来のようにトップダウン型ではなく、先進農家の技術が類似した条件の農家圃場に水平的に技術移転されるのが望ましいのではないかと。また、条件が多少違った農家圃場であっても、技術を農家が若干アレンジすることで技術移転できることも少なくないであろう。

地域別の研究・普及体制

有機農業技術は地域性が大きいことは、研究・普及体制の地域的な広がりを考える際にも大切である。気候別に大きくみると、寒地（北海道）、寒冷地（東北北部、東北南部、長野などの高冷地）、日本海側（北陸、山陰）、温暖地（関東、東海、近畿、山陽と四国北部）、暖地（四国南部、九州、沖縄）に分けられる。地形の面からは、平坦地と中山間地では営農体系は全く異なるであろう。土壌型の面では、1つの地域

に多様な土壌型（例えば砂壤土、重粘土、火山灰土）が存在することも少なくない。作目では、水田作、畑作、施設野菜、果樹・お茶、畜産がある。将来的には、多様な気候・地形や営農体系・土壌・作目を視野に入れた、きめ細かい試験研究・普及体制を整備する必要がある。

人材養成

しかし、現実には当面は「できる地域でできる作目」から研究開発に着手せざるを得ないであろう。それは、有機農業の歴史と現状を的確に理解した上で積極的に有機農業の研究と普及を行おうとする人材が決定的に不足しているからである。抜本的に最も必要なのは有機栽培農家と協働して有機農業技術の研究開発と普及を積極的に行う人材養成である。有機農業研修プログラムや大学における有機農業研究室の設置などきめ細かい人材養成プログラムが必要である。

詳しくは今年12月に発行される「有機農業研究 Vol.7」（日本有機農業学会発行）をご参考頂きたい。

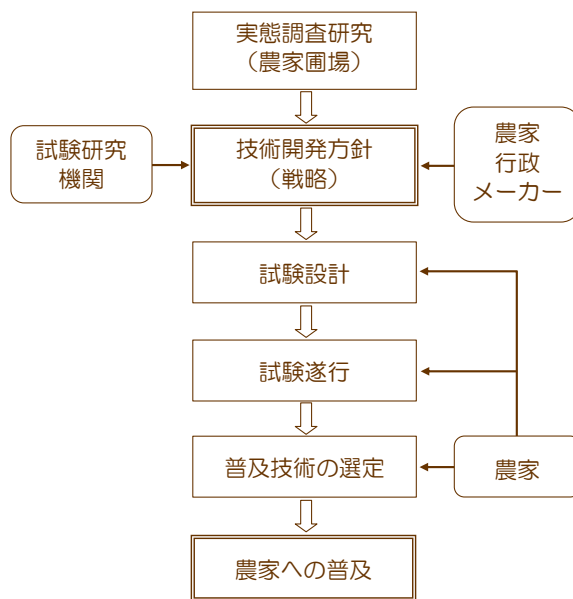


図 有機農業における技術開発の方法論

賛助会員募集のご案内

有機農業技術会議では、当会議の趣旨に賛同して下さる方を対象に賛助会員制度を設けております。会員の方々へは、電子メールによる機関誌や研究会などのご案内、研究会・研修会などへの割引参加、総合研究会への参加、ご意見・ご要望の反映などのサービスもあります。この機会に是非お申込みください。

お申し込みは技術会議事務局にご連絡ください。また当会議ウェブサイトwww.ofrc.netのホーム→入会案内からも用紙がダウンロードできます。皆様のご入会をお待ちしております。

NPO法人
有機農業技術会議事務局
 〒390-1401
 長野県東筑摩郡波田町5632
 (財)自然農法国際研究
 開発センター
 農業試験場 内
 FAX:0263-92-6808
 E-mail: office@ofrc.net
 Website: www.ofrc.net